

# ことばで生活は切り開かれたか

## - 学校設定科目「私達が立っている場所」10年の検証 -

大阪府立今宮高等学校

小山 秀 樹

### はじめに

国語科の学校設定科目として「私達が立っている場所」を展開して10年になる。総合学科3年生の現代文選択授業として平成12年に開講した。私達の社会がどうなっているかを知り、その中を生き抜くことばを獲得する授業を願ってこの科目名となった。私はかねてから、ことばの学習が日常生活に生かされるような、また日常生活からことばの課題が発見され、学習として取り上げられるような、そんな授業をめざしてきた。「私達」の授業では、本校最高の思考水準で授業と日常をつなぐことをこころがけた。本発表では、授業の実際をあらかじめ述べていきながら、過去の全受講生に対して実施したアンケート結果から、今後の授業を展望していきたい。

### 2. 「私達」の授業、指導の実際

「学ぶこと、考えること、感じること」「私達とこの現代社会」「しくみの中をことばで生きる」「私達が立っている場所とつくっていく場所」など、年間を四つの単元で構成する。授業はまず、力のある教材を使って自分達の日常生活を見つめなおすところから始める。そして年間二回のグループ発表、討論会の開催、中学生や保護者向け体験授業の実施、大学教授など外部講師による授業など、授業を日常のことばとつなぐ展開へとつなげる。(京都教育大学植山俊宏教授には、この授業を見守り続けていただいた。)使用教材、学習段階とその実際を表にするとおおよそ次のようになる。

段落	学習段階	学 習 の 実 際
1	力ある教材を使って日常を見つめ直す。 (授業の側から現実へ向く意欲とことばの力をつける。)	* 『『である』ことと『する』こと』(丸山真男)・・・日常の問題をことばにする絶好の教材である。授業は意見交換の機会をいつ、どのようにつくるかが重要である。話し合いで、人の意見に触れ自分の意見を相対化することは、問題を教材から離陸させ、現実の問題とさせる。 * 「文学のふるさと」(坂口安吾): 生きている現実がやむをえない形をしていて、自分もまた例外ではないこと、そしてそのことが生きる勇氣になることは高校生の現実へのエールとなる * 「パニック」(開高健): 個としての人間と集団のなかの人間、全体と部分など、矛盾のなかを生きるテーマは高校生を引きつける。「構造図」を作成させ、読みとる力も鍛える。
2	教材による学習から発展的な現実の課題とつながった学習へ (授業の側から日常を見つめる)	* 「服装自主規制」問題、「下校時刻」問題の考察: アンケートなどの実施。小冊子の発行。授業主催の討論会の実施。 * 「国語表現」「倫理」「現代社会」などの科目への学びの広がり・・・小論文を書くときの課題認識の方法と意見、社会科学系の科目へのリンクなど、「私達」の授業の学びを他の教科学習の学びと総合させる。 * オープンスクールでの体験授業の実施: 「私達」の学びを授業者として中学生・保護者へ 「『世界がもし100人の村だったら』を考察する。」 「激突! プレゼンテーション大会決勝戦」「必勝! 合格マニュアルづくり」

3	現実の課題意識を授業にのせる（日常の側から授業を構想する）	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 「生きるとは？」討論会：養護教諭も参加して実施した、少女売春をあつかった討論会。（立命館大学 馬路英和先生との連携）</li> <li>* さまざまなマニュアルづくり・・・「今高授業マニュアル」「水球部マネージャー完全マニュアル」など、日常の見つめなおし、確認、改善のためのマニュアルづくり</li> <li>* 本校教頭による授業・・・「ニーチェとの対話」「言葉に執して生きた人々」。</li> <li>* 外部講師による授業・・・「文学に遊ぶ、文学に学ぶ」</li> <li>- 短歌をめぐって -（京都教育大学 植山俊宏教授）</li> <li>「君たちはどう生きるか」（吉野源三郎）・・・作品の課題、日常生活の課題を総合しての文章づくり、討論会。</li> </ul>
---	-------------------------------	---

授業は段階を追うことをこころがけたが、ままたまならないことも多かった。日常の課題意識を授業に乗せることによって、学習者は学ぶ意味を再確認する。学習の姿勢をつくり、議論を深めるために、段階は必然的に行ったり来たりする。

発表の前日にグループの議論が沸騰し、当日資料を全面的に改訂する局面。帰った班員を班長が呼び戻した。下校時刻後、校門前でした立ったままの打ち合わせ。「私達」の授業の指導の特質は、それらの場面に寄り添い、助言を加えてひとつひとつをかけがえのない場面にある。

### 3. 「私達」の10年を検証

卒業後受講者は、日常生活をことばでしっかりつかんでいるだろうか。少しでも「私達」の授業は生活に生きているだろうか。またひとりひとは、どのような力をつけているだろうか。そのことを確かめるには、卒業生からの声を聞くことが必要である。「私達」は、3年生現代文のひとつの選択科目（学校設定科目）に過ぎない。その受講者全員に向けて授業の感想、その後の学びを聞くのはいささか大げさだったかもしれない。しかし、現代文の学習が日常生活に生きる「ことば」を鍛える学習である限り、その学びの成果は、受講者のなかに確かな「ことば」として生成、蓄積されなければならない。その「ことば」のひとつひとつを受講生から聞き、知ることができれば、これからの授業を確信して進めることができる。遠い将来に生くと信じて展開した授業に、また今後展開される授業にそんなかけがえのない「ことば」を与えたいと考えた。私はそんな気持ちから、10年間の受講者242名にアンケートを送った。そして、55名より回答を得た<資料>。数値の集計と自由記述から受講者の回答を見ていくことで「私達」の10年を検証してみたい。

#### どんな授業だったか

a この授業で私は、「考える」という事にとつともなく満たされていた。いや、むしろまだまだ知りたいという欲求に駆られたのである。満たされない思いを抱えたまま、大学で 偶然であったのが哲学であった。

テキストを読み解くということ

限りある時間の中で、他者の意見を取り入れ考え抜くということ

自分の考えを発表するということ

何気ない言葉は人にとって大きな誤解を招くということ

言葉による定義や制限と戦わなければならないということ

すべての点が線になった気がした。

b 「私達が立っている場所」を受講して、投げ出されることが、正直何度もありました。筆者の言いたい事や考えている事を、何度読み返してもなかなか理解できなかつたり、イメージとしては浮かんでも、うまく言葉にしてグループのメンバーに伝えられなかつたり。何度も何度も、諦めたくなくなりました。でも、逃げませんでした。ここで逃げたら、この先逃げ続けることになると思ったからです。どこにいても「言葉」というものが絶対についてくる。言葉から逃げるといのは人と向き合うことから逃げるのと同じなんじゃないかと思いました。だから「今もこの先も逃げない」と、この授業を受講した時に心に誓ったんです。

c 『私達』は一言で言えば、よく考える授業であったと思います。後にも先にも、『これでもか』と考えた授業はこれが初めてと言っても過言ではない気がします。卒業後、このような授業があったという話は他の人からは聞かないので、自分は恵まれた環境にいたと感じました。卒業後、人と議論をする際は、相手の話をじっくりと聞き、その考えを理解したうえで、ズレが生じないように、自分の考えを話すようになりました。また自分の考えも、発言する前に相手に伝わりやすいかどうか考えるようになりました。『思考する』ことが、この授業で一番身についたことだと感じています。

d この授業の売りの一つはディスカッションですが、日常生活では、こうした知的な意見の衝突なんてめったにありません。普段考えもしない他人の意見を聞けるいい機会です。その中で友達だって見つかるでしょう。交友関係は、高校時代はもちろんですが、その後にとっても貴重なものです。大学時代の交友関係は、「狭く深く」だと思いますから、「広く浅い」交友関係は高校生の特権ではないでしょうか。

e 私は国語系の教科が自分で得意だと思っていました。高校に入っても現代文のテストの点数は悪くなく、「私達の立っている場所」には力だめしというか、少し上目線で参加しようと決めました。しかしそこでは鼻っ柱を砕かれました。文章から意味を正確に拾いあげる事、そこから自分の中で理解していく作業、本当に苦手でした。今まで表面だけをさらってわかった気になってました。

f 話し合いでうまく意見の伝えられないもどかしさ、限られた時間での活動、Q & Aの恐怖や、発表の緊張…。大変なことも、たくさんありましたが、すごく達成感がありました。あれだけ必死にグループで学習する授業は、ないと思います。受験のためだけにした勉強は、正直ぼろぼろと忘れていっています。でも私達の授業で学んだことは、些細なことまで覚えています。これって、すごく大切なことなんじゃないかなと思います。

#### どんな態度・姿勢・考え方が身についたか

g 私は今宮周辺でホームレスを見てきて、貧困に興味を持ちました。だから産業社会学部に入学し、貧困や格差について学んでいます。大学で学んでいるとたまに小山先生の「勉強にしすぎなし」と「学ぶことに何のためらいがいるのか？」という言葉を思い出し、後押しされています。私は自分が関心を持った貧困問題についてもっと学んでいきたいと思いました。そして、少しでも貧困で困っている人たちの手助けになればと思います。

h まず、なによりもレジュメの作り方、プレゼンの仕方を身につけることができました。大学でも発表の機会は多々ありますが、レジュメを作るときの根本は今でも高校の時とほぼ同じです。そして同じ班で発表をした人とは目指した大学が同じだったこともあり、最終的には違う大学になりましたが今でも仲良くやっています。そのような人と会うと話題になるのが「私達」の事です。

i 「私達」で扱った題材に関連する今の自分の専門などが話題となり、「あの授業もみんなを作る一部となっているんだな」と感じます。もちろん、あまりうまくいかない班のときもありました。班のメンバーの理解の到達度が違うなど苦労もありましたが、それを乗り越えることで集団での学習を学ぶことができました。

j 具体的に年間を通して色々なテーマがあり学んだと思うのですが、私は「自分で考え、言葉にする力」を学んだと思っています。私は高校卒業後、大学で美学美術史を学びましたが、卒業後は営業事務、現在は建材メーカーの総務経理部で働いています。結局（表面的には）文系でもなく、学んだ分野からは程遠い仕事をしていますがどんな仕事をしていても生きていく限り「自分で考え、言葉にする力」は重要であると感ずます。ただ毎日過ごしているだけでも悩みや考えること、迷う事は尽きないですが、そのような時に表面的な事柄にまどわされず、その時の自分に精一杯の答えを出せるよう、考える力の土台をこの授業で学んだように思っています。

k 私は日本語日本文学科の2回生です。日文は、日本文学の研究が主で、どれだけ考えられるか、調べられるかが問われそれを発表しなければいけない。1回生の時から強いられます。グループ発表のリーダーになって、仕切っていくことに戸惑いがあったり、やるべきことは分かっていたり。スケジュールの把握、逆算して日ごとの計算、やらなければいけないことを書き出し、割り振る。いついつまでにこれをやってきて、集まったときに成果を見せ合う。みんなで一緒になんてできないのを「私達」で本能的に知った、得たと思う。だから大学でこういうことをしていても、みんなにやってきてもらうこと、集まってやること、を分けられる。とにかく「であることとすること」でリーダーをやったのはでかかった。すごく糧になった。

l 文章の内容を他人に説明できるまで理解するには相当深く読まなければいけない。その為、物事に対する考え方が深くなり、完璧主義の傾向が強くなった。考え方もパズルのように1つ1つ順序立てて考えることが多くな

った。

m 文章の“完璧な理解”のように“完璧な理想”を思い描けるようになった。目標を立てる時も理想から出発できるようになった。

n 人と長時間話（議論）をすることができるようになった。また自分の意見を明確にして話ができるようになった。

o 話が長くなった。ファミレスに長く居られるようになった。

p 「私たち」での学びは、そのまま大学での学びで通用しました。演習はもちろん、他大学の生徒と自主ゼミを作って語り明かした時でもいつも脳裏には「私達」での激しい討論がありました。

もちろん学問だけでなく、サークル等の人間関係においても「私達」は出てきます。まず何事も「真剣」に考え、取り組むことができるのです。「私達」では抽象的な事柄を多く学びましたが、それが現実と関係ないかというそうではなく私の「考え方」の支えとなっていたので人間関係で迷った時も偽りなく人とぶつかり合って接することができました。

q 大学時代、グループ討論の授業や就職活動の時のディスカッションなどで自分の意見を発表すると同時に、他人の意見を聞く力、全体の意見をまとめる力がついてきたように思う。

- ・ 1つの事柄をいろんな角度から見るようになった。
- ・ 他の人の話をより深く理解しようとするようになった。
- ・ 自分の意見と相手の意見を客観視して頭の中でのいるんな見方を立体的に組み立てれる気がします。
- ・ 本を読む時、1回じゃなく何度も読むことで新たな発見があることを学べたので、気になる部分は二度読むようにしています。そうすると、気がつかなかった発見があるので、私たちにとって良かったと思うことがあります。

r 大学に入ってから“知っている事とできる事は違う”とよく人に言われるようになりました。「私達」はまさに知ることをできる事に転換する事だったんじゃないかなと思返していて思いました。「知る事」で満足していた私にとって私達は自分の考えに革命を起こすチャンスだったと思います。実際、私が真剣に授業と向き合えたのかと言うと疑問です。そのため今だに知るとできるの違いに苦しんでいます。「私達」で得た事の1つに人とのディスカッション力があると思います。とにかく人に自分の考えを伝えるために口頭だけでなく文字や記号、図にしたり、出来得る事をしまくり伝えるという作業をしました。またそんな状況だから、人の話を聞くことにかけてもかなり鍛えられたと思います。大学のゼミや就職活動でもこのスキルはとても役立ちました。

### ことばで生きるということ

s この授業を受けたことは、今の自分に極めて影響しているように思えます。本を読むことで得られるものというよりも、もっと人というものがわかったような気がします。同じ作品を読んでいるのに人によって捉え方が様々で、同じ人間なのに違う。改めて、強く感じました。この授業は、生半可では通用しないくらい内容が高度で充実していました。もちろん、小山先生も魅力的で恵まれていました。だけど、自分の一年間の記憶が表面的にしかとどめていなかった。本当に失礼で、やはり、この授業はやる気が凄くある人が対象であるのに、結果、自分は単位が取ればいいに終始していました。そうであるのに、得たものが非常に大きく、まさに今の自分ができあがり、視野が広がり、いろいろな考えができるようになりました。しかし、その反面、悩みがさっと解決できなくなり、本当に悩むことが苦しくなったりします。これはこれで、よく言えば、今の自分における特権なのかなあとも思います。これを機に、どんどん成長していきたいと思い、そして、どんな真実も受け入れられる強さを手にいれて、これから先、よく物事を判断して悔いのない人生を送りたいと思います。

t 「本当にそうなのか？」の思考を、もはや意識的にではなく、日常的に行うようになったこと、これは私の中で「私達」が生き続けていることの何よりの証拠であると、日々感じている。

u 私は今、法学部ですが、法律が作られた目的などで民主主義の考え方があげられることがとても多いです。例えば、「権利の上に眠るものは保護に値しない」という言葉は民法を学ぶ上でよく使われます。これはこの言葉だけ聞いても意味はわかりますが、やはり丸山真男の「日本の思想」を読んだ上で聞くのとは理解の深さがかなり変わってくると思います。このように1つの事柄でもその根本となる考えを知っているかどうかで、新しく得た知識をどこまで自分のものとして理解できるかが大きく左右されます。「私達」はこの根本となる考えを扱い、また新たに知っていく機会を与えてくれたと思っています。

v 私は病気をして、2学期はほとんど授業を受けられませんでした。1番印象に残っているのは、とにかく、読んで書いて、読んで書いての繰り返しで大変だけど、文章を読み込むことのおもしろさを知ったことです。授業中のことは申し訳ないのですがあまり思い出せなくて、ひたすら、書きまくって書きまくって考えた印象が強いのです。受験にはもちろん役に立ちましたが、何より、日常で深く考えるクセがつきました。1つのことをある一面から見るのではなく、多角的に見ようとする事ができるようになりました。

w 自分自身、「私達」をとっていた現役のころは、ただ、ただ授業を受けていただけだったが、卒業後、大学に進学してみると自分が周りとは多少違うことが分かった。僕はいつも自分の意見と、客観的な意見の両方を持って生活しています。それは至極当然なことだと思っていたのですが、実はそういうわけではなく、周りには客観的に物事を判断できる人間はなかなかいませんでした。正直びっくりしました。しかし今考えてみると、僕がこういう風に客観的に物事を判断できるということは「私達」の授業をとっていたからこそなのかなぁって思いました。無意識的に客観的にみるというクセがこの授業でついたように思います。客観的なモノの見方ができるというのは、人間的にも社会に出るという面に関しても非常に大事なことだと思うので、とても感謝しております。

x 「私達」での学びの経験は、大学で度々訪れるその場面で、私を多弁にさせるより、むしろ寡黙にさせたように思う。もちろんそれは、考えることを放棄したからではなく、むしろ「考えを尽くした上での言葉」の重さ、つまりその場の思いつきで浮かぶ言葉は軽く、それらはいくら集めたところでたいした重さにはならないが、考えに考え抜いた上での言葉は、たとえ一言でもずっしりと響くということを「私達」で身をもって学んだからである。実際、大学の授業における議論の中で、私が搾り出した、たった一言がその後の議論の方向やテーマを決定付けたときは、「考えること」の重要性を改めて思い知るとともに、「私達」でやっていたことが報われたようでうれしかった。

y 授業の中で、ただ投げられたもののキャッチするだけでなく、自ら、投げるものの色や形を観察し、先生や仲間とキャッチボールをしながら学べたことでものごとには本質があることを体験することができました。

#### 4. ことばを鍛える、ことばで生きる

「私達の10年」検証のアンケート結果から感じられるのは、経験することの重み、そして若い学習者の学びのエネルギーである。当時の「私達」の授業に対しての彼らの学びの姿勢など、さほど重要ではない。長時間の話し合い、私や友人の発言、テキストを真っ黒にした書き込み。それらのひとつひとつの経験が、そのとき彼らがどのような態度であったかに関わりなく重層的に彼らの記憶に残り、振り返らせ、その都度彼らを学習させた。それは、今の自分よりもましになりたい、よくなりたいというエネルギーに導かれる。私の授業でこころがけなければならないことは経験の種を一緒に播くこと、彼らの持つエネルギーに気づかせ、一度全開させることであった。多くの緊迫した、将来振り返ることのできる場面をつくり、ことばの活動に関わったいくつもの経験をさせる。そうすれば彼ら自身で花を開かせてくれる。そう確信する。

「歴史としての科学」が大学の講義で取り上げられた時、当時学んでいたグループの中で一人余裕で理解していた。講義自体のレベルも「私達」と比べると低いものだった。今思えば、教育の質は学校の種類に比例するものではない。高校教育の可能性って想像以上に明るく開けているものなんだって気づいた瞬間だった。なんか逆説的にね。後にそのことをダンス部の活動を通して確信しました。高校ってすごいところ。

現在日本代表としてアメリカ遠征までするようになったダンス部の草創期に関わった彼は、深い経験は、生涯を通じて振り返ることのできる学びの場面となり得ることに気づいている。

『私達...』の授業は思い出すので、このようにアンケートが送られてきて、とても嬉しく感じています。近頃は、忙しくてゆっくり物事を書いて考えることもなくなっていたので、なんだかハッとさせられたような気分です。そしてもっと勉強して、色々考えないとなあとも思いました。

学習者は、彼らの生活のリズムに応じて自然と気づき、ことばを獲得する行為を継続させる。それはゆっくりとしているが、誰にも等しく訪れる運動である。そして消費されるのではなく、大切に扱われることばが生まれ、そのことばによって学習者は生きる。今回のアンケートの検証は、学習者ひとりひとりにある、ささやかであるが確かな運動を再確認することになった。私はことばの学習の指導を通してその運動が力強く継続することに資したいと思う。